



校長室だより

令和5年度

9月 5日

NO. 21

多様性の世の中を生きる

4年生の国語の教科書に「せかいいちうつくしいぼくの村」というお話が載っています。夏休みに、作家であり絵描きでもある小林豊さんという作者の話聞く機会がありました。小林さんは今も、世界の様々な国を訪れ、絵を描き、そこに暮らす人や言葉、その地のおいや風からその土地の様子を感じ取っているそうです。お話の中の「せかいいちうつくしい」村は戦争によって破壊されてしまいます。けれども、小林さんは、「人はそれを取り戻すことができる」と言います。戦争という暴力には、一人ひとりの主語もなければ意思もありません。(その人個人がやるのではなく、国という集団によるものだからです。)けれども人には、それぞれ意思やその善悪について考える頭も言葉もあると言われました。そして教育こそ、そうした自分という「主語」を導く道筋であると言われました。

また、今話題の作家、辻村深月さんのお話を聞く機会もありました。「かがみの孤城」は、映画化もされ、話題になりました。10代の子や学校が舞台となる作品も多く、子供にも読む人も多いと聞きます。そんな子供たちに対して、「楽しい」という気持ちを持ち続けることが大事だと言われました。「楽しむ」という自由さがあると、いつかいろいろな苦手が取り払われると言われたことが印象的でした。「挑戦」にも、どこか「楽しむ」側面が必要だと思います。困難に立ち向かうことを楽しめる強さを身に付けてほしいと思いました。

コロナ禍やその期間と重なったGIGAスクール構想等もあり、ここ数年、学校を取り巻く状況も大きく変わってきました。授業も、チームで協力し合ったりiPadを使ったりして学ぶ形が、一般的になりつつあります。中学校の部活動も地域移行に向けて、いよいよ動き出しました。(小学校も、変わっていくことと思います) 秦梨小も、陸上以外は行う競技を限定せずみんなで活動するようになります。そうした時代の流れにそって、子供たちや人々の価値観も変わったり、多様化したりしていきます。今まで当たり前のように考えていたことが、変わっていくことが、きっとこれからも数多く出てくると思います。(今もマスクの有無については考え方が人によって違うように…) そうすると、今後は、自分の価値観だけで決めるのではなく、いろいろな可能性を考えたり、本当にそれでよいのか考え直したりしなければならないことも出てくると思います。子供たちにとっても、そうしたいろいろな考え方ができることが、必要な能力になるでしょう。

そうした状況の中で、多くの人からいろいろな話を聞いたり、様々な体験をしたりして、自己を見つめることはとても大事になると考えます。教育でも、人の話を素直に聞くだけでなく、今は、本当に大切なものは何か考え、自分はどうするのかを選択することが必要となります。秦梨小でも様々な行事や、「ふるさと学習」等、いろいろな体験を通して、自分自身を振り返る、自分自身で選択する、そんな経験ができるとうれしく考えています。